

われら地球人 NPO・NGO 奮闘記 第6回

自立した人生を 「手伝う」仕事

世界を舞台にさまざまな活動に取り組んでいる日本人がいます。この連載では生活環境や文化、考え方の違いに悩みながら、奮闘する彼らの姿を紹介します。

6回目はネパールに口唇口蓋裂医療チーム派遣などを行っている特定非営利活動法人 ADRA Japan の橋本笙子さんにお話いただきました。



はしもとしょうこ
事業部長

第6回 特定非営利活動法人
ADRA Japan (アドラジヤパン)
橋本笙子さん

世界最貧国の一つであるネパールではさまざまな支援活動が行われています。ADRA Japanも1990年から支援に入っていたのですが、1995年からは年1回ネパール政府の要請を受けて、口唇口蓋裂医療チームの派遣を行っています。私がボランティアではなくスタッフ

としてADRA Japanに関わるようになったのも1995年でしたので、開始当初からこの活動に携わっていることになりました。

ネパールの識字率は近年少しずつ改善されてきたとはいえ、依然低い状態です。特に地方の識字率は低く、情報や知識は限られます。そうした環境で上唇や上あごが裂けている口唇口蓋裂の子どもが生まれると、母親の前世の行いに問題があったせいだなどと白い目で見られたり、差別やいじめにさらされます。活動を開始した1995年はそうした傾向が今以上に強く、母子共に捨てられるケースも見られました。

口唇口蓋裂は死に直結するものではないため、どうしても支援が遅れてしまいがちですが、その見た目などから、人間としての尊厳が損なわ

れてしまう障害なのです。

一番の困難は「継続」させること

ADR A J a p a n の医療チームの派遣期間は約2週間。2010年の派遣では執刀医7人が滞在期間をずらして参加し、50人の患者の手術を行いました。手術対象となる患者はネパール人スタッフが各地を訪ね、声を掛けるなどして集めてきているのですが、ネパールの地方には病院がほとんどなく、病院で病気を治すということを知らない人もいます。また臓器売買の問題もあり「手術」への不信感が強く、「無料で手術が受けられますから」と言っても簡単に信用してもらえません。活動が口コミで広がってきたことや、識字率の上昇によって改善されてきて

はいますが、開始当初は声を掛けたスタッフが石を投げられて追い払われるということもありました。

また、この活動は今年で16年目を迎えるのですが、実は過去に1度、資金不足のために派遣ができなかった年があります。1回の派遣には約1000万円強のお金がかかります。このうち半分強を占める医師・看護師等の渡航費は各自に負担していただいているので、ADR A J a p a nとして集めなければいけない資金は約500万円です。初めのうちは政府資金が受けられたのですが、同じ活動が、継続して政府資金を受けることはできないため、必要な金額が集められなかった2007年は派遣ができませんでした。

1995年当時、ネパールで口唇口蓋裂の手術ができる医師は1人で

した。現在ではだいぶ増えてきましたが、彼らの治療を受けるお金が支払える人はまだまだ限られているため、活動を継続する必要があります。しかし、こうした継続が必要な支援は、災害時などの緊急支援より資金援助が受けにくく、資金繰りには毎回とても苦労しています。



口唇口蓋裂の手術に集まった患者さんと家族

ボランティア活動は 与えるより、与えられる

私が初めて海外支援活動に参加したのは、ボーイスカウトのような活動をする少年・少女クラブの指導をしていた1988年です。クラブを卒業した高校生以上の子どもたちが、何か奉仕活動をしたいと言い出したことから、クラブと同じキリスト教系列のADRA Japanに相談し、ちょうど計画されていたマレーシアで井戸を作る約3週間のボランティア活動に参加することになったのです。

当時、私はシステムエンジニアとして勤めていたので、長期の休みを取ることを取引先などに説明して回ったのですが、「ボランティア」という意識がまだ根付いていない時代、

「休みを取ってボランティアをしにマレーシアに行く」と言うと、とても驚かれました。しかも私たちの渡航費は1人約18万円。16人で渡航して6個の井戸を作る計画だったので、当時ADRA Japanで井戸を一つ作るのに必要な資金は25万円程度。3人分の渡航費で二つの井戸が作れるわけですから、お金だけ出した方が効果的ということになります。「何でわざわざ行くんだ」と問われると、答えられませんでした。

実際、渡航した私たちにできたことは微々たるもので、村の人たちが指示した場所に一緒に井戸を掘り、一緒に生活をしたということだけでした。しかし活動の最後、村の首長がスピーチの中で「井戸はお金で買えるでしょうし、いずれ朽ちていきます。でもあなた方がこの村に来て、



術前診察を受ける患者さん

私たちと一緒に過ごしてくれた、その愛の行為は永遠に語り継がれます」と言ってくれたのです。私はその言葉に思わず泣きそうになりました。

私たちには「貧しい人たちのために手助けするぞ」といった、上からの目線がどこかにあったと思います。でも支援の現場には、与えられるも

の、考えさせられることの方がずっと多かったです。

実は私は生後6カ月で小児急性白血病にかかり、もう助からないとされていました。そのため、子どもの頃から「助かった命なのだから、人のために何かをしない」と言われ続け、その「何か」を考え続けてきたのですが、答えが出ないままスラムエンジニアとして働いていました。マレーシアでの経験、首長が言うてくれた言葉は「自分にできる『何か』とは、これなんじゃないか」という、子どもの頃から考え続けていた問いの答えにつながりました。

いずれは現地の人に

こうした支援活動との出会いは私にとって大きな意味のあるものでしたが、支援が必要ということは何ら

かの歪みがあるということですから、いずれは不要になってほしい仕事だとも思っています。現地の人々が主役として自立した人生を生きていくための「お手伝い」が私たちの仕事であって、私たちが主役になってはいけません。

ネパールの活動についても、単に継続していくだけではなく、いずれは現地の人に引き継がなくては

ないと考えています。そのため、現地の医療技術や看護技術の向上はもちろん、医療機器のメンテナンス技術などを教える取り組みも行っています。また、そうした医療技術の向上だけでなく、医療を受けられるだけの経済状況や医療・手術というものの対する人々の意識を変えるための働き掛けの方法も、今後は考えていく必要があると思っています。



特定非営利活動法人

ADRA Japan (アドラ・ジャパン)

9つの地域管轄支部と約120カ国の支部で構成する国際NGOの日本支部「アドラ国際援助機構」として1985年に設立。各支部との協力の下、緊急支援や経済開発などに取り組む。

主な公的協力機関・加盟団体

ジャパン・プラットフォーム、日本UNHCR-NGOs評議会、教育協力NGOネットワーク他

スタッフ構成

スタッフ 18人

インターン 2人

ボランティア 5人

連絡先

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前 1-11-1

TEL 03-5410-0045